

『生徒たち』

橘「最後の学級会議の少し前、金井が授業中に挙手してトイレに行く場面があるじゃないですか。あそこ、私、すっごく好きなんです。他の部員にこの事言ってもイマイチ共感、得れないみたいなんですけど。あの挙手、いわば、いじめの問題にそれまで見て見ぬフリ、受動的に関わってきた金井が、能動的に変わる、その変化の兆しみみたいなもんなんだって、私思ったんです。そう考えると、金井って子は、トイレ、行きたくても、挙手しないで我慢するやつなんだって思った時に、なんだか、私、しっくりきたんです。あ、この人、私とおんなじだ。ビビビビビって、きて、この役、私にピッタリくっついたんです。自分が役に近づいていくっていうか、役の方が自分に張り付いた、そうなったってのが正確な言い方なんだって」

斎藤「どうりで橘の金井、随分良くなったって思った」

橘「ありがとうございます。そういった体験、先生、ありますか」

斎藤「無かったな。ビビビビビってのは」

橘「そうですか」

斎藤「うん。でも、そういうビビビビビみたいな体験を一度でもしたって人が、結局長続きするんだろうなと思う。特に演技とか、そういう事はさ。先生は、これまでそういう瞬間、無かったんだよ。だからかな。橘の事、とても羨ましく思える」

橘「先生は教師初めて何年経つんですか」

斎藤「今年で8年目」

橘「続いているじゃないですか。教師。なにかあったわけでしょ。ビビビビビって事」

斎藤「特になんにもなかったけど、続けてる」

橘「そんなもんですか」

斎藤「うん。そういえば、橘、進路どうなってるの。佐伯先生が気にしてたぞ。東京で演技の勉強をしたいなんて言うもんだから。ちゃんと考えてるんだろな」

橘「ネットで資料請求したんで、大丈夫です」

斎藤「そこで、演劇の勉強するのか」

橘「映画の演技もです。1年目は広く浅く演技の経験して、2年目でそのどちらかを選択し、結果専門的に学んでいく形です」

斎藤「そう。担任なんだからさ、佐伯先生にもちゃんと報告するんだぞ」

橘「はい。言わなきゃなって思っていたんですけど、田中君の事でなんだかバタバタしてたじゃないですか。だからそれ所じゃないってないっ！って。駄目ですね、私。でも、ちゃんとこの勢いで報告してみようと考えていますんで」

斎藤「うん。もう少ししたら戻ってくるからさ。安心するよ。先生、結構心配してたんだからさ」

橘「そうします」

斎藤「桑野はどうだ。もう決まったのか」

桑野「マウントビューです。立山の」

斎藤「そうか。じゃあ、小宮山と一緒にだな」

桑野「はい」

斎藤「うん。ところで話変わるんだけど、桑野。そのTシャツ、好きなのか？THE WHO」

桑野「いえ、好きではないです。パパから貰いました。昔バンドやってて、それ貰いました。変ですか」

斎藤「そっか。いや、さっきから気になって。THE WHO聞いたか」

桑野「パパにレコードで何度も聞かされました」

斎藤「どうだった」

桑野「聞いたんだけど、なんだかよくわかりませんでした」

斎藤「先生も。THE WHO、あんまり好きじゃないな」

桑野「好きでもないバンドのTシャツ着るの、そんなに悪い事ですか」

斎藤「そんな事言ってない。第一、とても桑野に似合ってるよ。デザインとして」

桑野「いえ、先生。今、THE WHO、好きでもないのに、って顔しましたよね。先生だって、修学旅行で広島行った時、「U.S ARMY」って白地で書いた紺色のTシャツ着てた。一緒じゃないですか」

斎藤「THE WHOはイギリス。同じじゃないんだから」

桑野「稽古着です。外では着てませんから。恥ずかしい。あ、あと、これ家着なんで」

斎藤「そういえば、マウントビューって言ったら、直接面識無いかもしれないけど、演劇部で神田って奴、働いているぞ。神田圭。名前、聞いた事ないか」

桑野「知らないよね」

斎藤「二人が働き出して、もし神田に会ったら伝えて欲しい。先生、まだ神田の漫画預かってるって」

桑野「先生が言ったらいいじゃないですか」

斎藤「それがそうもいかないんだよ」

桑野「なんですか。漫画、没収したんですか」

斎藤「5月に企画コンペあるだろ。それで当時、神田なにも思い浮かばなくなって、なに考えたか彼奴、漫画全巻、持ってきたんだ。これを戯曲にしますって。その時に先生見てください、意見下さいって言って持ってきて、で、その時」

桑野「コンペ、どうなったんですか」

斎藤「他の部員は、あれ、結構一生懸命考えるだろ。そんな中アイツ漫画持ってくるわけさ。そうすると、他の部員も当然怒るだろ？やっぱり。で、案の定、部員からバッシング。そんな様子見てたら先生、なんだか神田が不憫に思えてきたんだよ。でも権利の問題もあるもんだからさ、だから、一度出版社に問い合わせしてみたらって言ったんだよな。そしたら神田、作家に手紙を書くんだって、やる気マンマンだったんだけど。暫くたって、急に面倒くさくなっちゃったんだろうね、それっきり。以降、先生の前でその話一切しなくなって、タブーって感じかな。気まずくなって。で、そんな様子見たら、こっちも気を使うじゃない。返そうにも返せないし、だから、卒業して、そのまま大分と時間がたってしまったってわけさ」

桑野「そうなんですね」

斎藤「うん」

桑野「その神田圭さんは男子？女子？」

斎藤「女子だね」

桑野「わかりました。会えたら伝えておきます」

斎藤「うん。頼む。でも次の春の事だから、まだ先の話だ」

桑野「はい」

橘「先生。そろそろ。部活、止まっていますんで」

斎藤「じゃあひとまずそんな事だ。田中の事は先生に任せて」

橘「はい。ありがとうございます」

斎藤「後で、稽古見に行くから」

橘「何時頃になりますか」

斎藤「7時過ぎかな」

橘「通し稽古中ですね」

斎藤「うん。邪魔にならないように覗きに行くよ」

橘「はい」

椅子から立ち上がり、その場を去る橘と桑野

小宮山は座ったままだ

斎藤「どうした。行かないの」

小宮山「今日は体調が優れないので早退させて貰いました」

斎藤「そう」

小宮山「はい」

斎藤「どうした。先生に、なにかあるんだろ」

小宮山「なんにもないです。自分の席にただ座っているだけ。ダメなんですか」

斎藤「あ、そうか」

小宮山「先生、自分の教え子の席、忘れたんですか」

斎藤「いや、勿論覚えてるよ」

小宮山「でも、今、忘れてるって感じ結構しましたよ」

斎藤「そんな事ない」

小宮山「先生、嘘ついてる」

斎藤「忘れてない。じゃあ正直に言うよ。先生、何年も教師やってるだろ。すると、小宮山が、自分の席って言っているその席に、また別の生徒が座っているように思えるって事が、こういう時間帯、稀に、起こるもんなんだよ」

小宮山「先生がなんと言おうと、ここは私の席です。絶対私、誰にも席、譲るつもりありませんから」

斎藤「そう、小宮山の席。だが、先生にとっては今は小宮山の席であって、何年か前には川端の席でもある。小宮山は川端の事知らないから分からないと思うけど、そういう事も先生にとっては全部ホントの事。先生の真実だ。わかってくれよな」

黙り込む小宮山

斎藤「悪い。先生、ちょっとトイレだ。なにか相談があるなら、ちょっとここで待ってて欲しい」

小宮山「はい」

教室を出て、廊下を歩き、トイレに向かう斎藤。

小宮山はそのまま、自分の机に着座している。

男子トイレの中に入り、大便器の扉を開け、ズボンと下着を脱ぐ。

和式の大便秘器の上に跨り、用を足す。

と、隣のトイレから、声。

田中「先生」

斎藤「はい」

田中「斎藤先生。田中です」

斎藤「ああ。なんだ田中。お前ビックリさせるなよ。なんだ一体、こんな時に」

斎藤、トイレットペーパーに手をかける。

田中「駄目です。先生、そのまま」

斎藤「田中、変だぞ。お前、なんのつもりだ」

田中「先生、さっき橘達の相談に乗ってましたね」

斎藤「ああ。そうだ。でも、それは橘達の進路の事だ」

田中「いえ、それは嘘。先生は僕の事で橘達から相談を受けていた。違いますか」

斎藤「だからなんだって言うんだ」

田中「やっぱりそうなんですね。でもここだけの話、先生、橘達が言っていた事と、事実とは大分と異なりますんで」

斎藤「なに言ってるんだ。こんな風に言われても、先生田中の事、全然分かってあげられないぞ」

田中「弁解させて下さい」

斎藤「先生も一度田中と話、したいと思ってた。分かった。じゃあ、ちゃんと話そう」

話しながら大便器のレバーを引き、ズボンを上げ、立ち上がる斎藤。

便器の流水音。

トイレのドアに手をかける斎藤。

田中「開けないで。先生、そのまま、そのままいでください」

斎藤「なんで」

田中「とりあえず自分の話、聞いて下さい。そしたら全部わかるんで。そうすれば、真相わかりますから」

斎藤「わかったよ。田中の好きにするといい」

田中「はい。先生、ありがとうございます」

斎藤「で、どうした、なにが誤解なんだ。先生にホントの事、教えてくれないか」

田中「稽古中、三木が段取り間違えた事が発端になり、僕と激しい言い合いになって、結果、僕が三木に椅子、投げつけて怪我させたって話は、多分橘達から聞いたと思うんです」

斎藤「うん。そうだ。田中、普段お前、そんなキャラじゃないもんだから、皆ビックリしてた。なんでそんな事になったんだ。理由、なんなんだ」

田中「だから、先生、全部誤解なんです」

斎藤「橘の話、説得力あったけどね」

田中「あの日、俺と三木、部分稽古してたんです。西川と河原崎が、土手を歩く場面」

斎藤「うん」

田中「いじめる側だった西川が、河原崎の家庭環境の問題を垣間見て、自分と同じ境遇の河原崎に少しだけ心を開く、物語上重要な場面なんです」

斎藤「先生も好きなシーンだ」

田中「まず、段取りを整理しました。土手を歩く二人。先頭に西川、その少し後方に河原崎。二人は無言のまま等間隔を維持しつつ暫く歩く。小石にけつまずき転びそうになる河原崎。それに気づき、振り向く西川。目と目が合う二人。西川振り返り、歩き出す。河原崎、慌てて小走りになる。隣り合って、土手を歩く二人。これを何度か繰り返しました」

斎藤「うん」

田中「何度も練習しているうちに、二人とも役、掴んでいきました。で、通し稽古始まりました。それで、いよいよ中盤の土手の場面って事になったんです。それで僕、部分稽古と同じ段取りで、無言のまま暫く歩いて、河原崎が小石に蹴躓いた時に小声で言う「あっ」って声、きっかけにして河原崎の方、振り返りました。出来るだけニュートラルな表情、作りました。で、目を合わせなきゃならないんで、西川の顔、少し強引に見たんです。西川の目と僕の目が合いました。それまでの関わりの中で、初めての事です。だって、二人はそれまでまともに目なんて合わせた事、なかったわけじゃないですか。で、その時、河原崎の顔初めてちゃんと見て僕、思ったんです。あっこの顔は駄目だって、これは間違った顔なんだって。だって、西川がしてきた事は赦される事では決してないし、あの顔になった要因はもしかして、西川だけのせいではないのかもしれないんだけど。河原崎を、三木をあんな顔にさせたものに、絶対負けたくないって、その時、僕ハッキリ思ったんです」

斎藤「だからって、椅子を投げつけていいって事にはならないよな」

田中「そうなんですよね。だから、僕、その後、急いでこのトイレに駆け込みました。自分の顔見るためです。西川にあんな顔させてるものが、一体、どんな顔してるんだって。で、見たら、いつもとなんにも変わらない僕の顔、そこにありました。そうすると、どういう表情していいか分からなくなってくるってもんじゃないですか。だから、先生が男子便所に入ったのを見計らって、こういった形で先生に話しかけているんです」

斎藤「わかったよ。田中。でも、田中。先生も、田中をそうさせたってものが、どんな顔してるかって見てみたくなった」

田中「え」

突然ドアを開け、隣のドアを開け中に入っていく斎藤。

両手で顔を覆い、必死に抵抗する田中。

田中「やめて下さい。やめて」

斎藤「河原崎にそんな顔させたものと、先生も田中と一緒に戦いたい。だって、俺、田中の先生だろ。田中の隣で戦わせてくれ。頼む」

田中「やめろー」

田中の顔を覆っていた手を力づくで剥ぎ取る斎藤。

ようやく田中の顔を見て、啞然とする。

田中、隙をついてその場を去るが、斎藤はその場に残っている。

暫くののち斎藤もトイレを出るが、田中の姿そこには無い。

洗面器で手を洗い、自分の顔を鏡で確かめ、男子便所を出て、廊下を歩き、教室に入っていく。

教室では小宮山が待っている。

小宮山「遅いです。先生」

斎藤「ごめん」

小宮山「なにしてたんですか」

斎藤「ちょっと、佐伯先生に捕まってね。橘の事、伝えておいた」

小宮山「そうですか」

斎藤「うん」

小宮山「先生、私、あの時、とても違和感、感じたんです。で、それからずっとその事考えてました」

斎藤「どんな違和感を感じたんだ」

小宮山「神田さん、神田圭さん。先生の教え子の。きっと出したと思いますよ。手紙、漫画の作者に」

斎藤「なんでそう思うんだ」

小宮山「いやなんとなくです。でも私確信あります。神田さん、多分ずっと待ってるんだと思います。漫画の作者からの返信。だって、私なら、絶対速攻で出しますもん。作者に。周りから色々言われて、いい事なんてひとつもないのに、どうしてだろう私はどうしてもこの話、劇にしたいんだぞ。突き動かされるんだぞって。伝えたいって思う。だからですかね」

斎藤「今もか」

小宮山「はい」

斎藤「マウントビュー立山で？」

小宮山「多分」

斎藤「そっか」

席を立つ斎藤。

斎藤「小宮山。先生、そろそろ稽古行くから、ここ離れるよ。小宮山は、どうする。体調、悪いんだろ」

小宮山「帰ります」

斎藤「うん、じゃあ電気、消すぞ」

小宮山「はい」

席をたち廊下に出る小宮山

電気を消す斎藤。